

夫婦関係の認知が青年期の恋愛イメージにおよぼす影響

～DV との関連の検討について～

Influence of cognition of marital relationship to the image of love in adolescence.

～The relationship of domestic violence～

臨床心理学研究科 臨床心理学専攻 1000-080721 益子浩美

[問題と目的]

子どもにとって家族は、生まれてから一番初めに接する人々の集団であり、後の人格形成やその成長に大きく影響を及ぼすものである。とりわけ両親である夫婦関係のあり方は、子どもの両親観、家族観の認知と関連し、さらにその認知は子どもの社会的適応性と関連している（梶浦・宮下，1988）。また子どもが捉えた夫婦関係のあり方が、子どもの活動性、外向性とも関連していることが明らかにされている（木暮・広瀬・三好，2004）。

上記で述べたことはドメスティックバイオレンス（以下 DV と称す）が存在する家庭においては特に問題になると考えられる。これまで、日本における研究では子どもへの暴力は、児童虐待として取り扱うことはあっても、DV との関連で取り扱うことはなかった。しかし、DV を目撃している子どもには、幼少期から抑うつ傾向や攻撃性の高さ、学習困難、強い対人不安など様々な行動面・情緒面での問題がみられることなどが明らかにされている（岩瀬，2004）。これらの他にも、DV が子どもに与える影響として異性関係への親密性の問題が考えられる。その一例として、成人前期女性においては、親の結婚幸福度の認知が結婚に対する一般的態度に影響すること（伊東，1997）が示され、子どもから見た夫婦としての関係性の質に対する認知と、子ども自身への様々な心理的要因には関連があり、さらには、子ども自身の恋人関係の質との間にも関連があると考えられる。

以上のことから、夫婦が子どもにとって良好な関係性を築き維持することは、子ども自身への心理的要因に影響するだけでなく、次世代の恋愛関係にまで影響を及ぼすといえる。よって本研究では、これまで夫婦間で行われてきた DV がどのくらい子どもの目に曝されてきたのか、そして、その夫婦関係のあり方に対する子どもの認知に焦点を当て、青年期以降に子どもが抱く恋愛へのイメージとの関連を検討するものである。また今回は男子青年にも焦点を当て、これまで女子青年において重要とされてきた父親から母親への関わりに関して、男子青年も対象とし検討を行うことを目的とし、次の 3 つの仮説を検討する。

(1)、DV 得点が高いものほど、子どもは夫婦関係を不良と認識し、女子青年においては

「両親間の意思疎通」および「父から母への許容性」が低くなる。

(2), DV 得点が高いものほど, 子どもは夫婦関係を不良と認識し, 男子青年においては

「両親間の意思疎通」および「母から父への許容性」が低くなる。

(3), DV 有群においては, 恋愛イメージの「大切・必要」, 「相互関係」, 「成長」(恋愛のポジティブイメージ) が低くなり, 「刹那的」(ネガティブイメージ) が高くなる。

[本研究のまとめと課題]

本研究は, 夫婦関係の認知が青年期以降の恋愛イメージに及ぼす影響を DV という視点を加えて検討することを目的として行ったものであった。

両親の関係性の良好さを示す「両親間の意思の疎通」と「父親から母親に対する許容性」は DV があると子どもが認知しているほど女子青年のほうが高く, 男子青年においては「両親間の意思の疎通」のみが低い結果となった。したがって、仮説 (1) は指示される結果となり、仮説 (2) についてはその一部を支持する結果になったと言える。これらの結果は, 暴力の連鎖の観点から言われる, 女性のほうが男性よりも親からの暴力に対して強くダメージを受けている (八木, 吉野, 荻野, 2007) という結果を支持するものである。

また, 一般に暴力を振るう男性というのは男尊女卑の考えを持っていることが多く, 女性と自分を対等な関係だと認識していない。そのため女性の考えや話しに耳を傾けることが困難であると思われる。このあたりのことが, 「父親から母親に対する許容性」に反映したのではないかと考えられる。一方, 男性に関して言えば, 女性は長年にわたり男性から暴力を受けることで恐怖を感じ, 何をやっても逃れられないと感じていることが多く, 男性に対し意見をしたり, 正面からぶつかり話し合いをするということも無いのではないかとと思われる。そのため, 「母親から父親に対する許容性」にあるような姿勢を, 夫に対し表現できていないことも考えられる。

また, 恋愛イメージと DV との関連は, DV があると子どもが認知しているほど, 恋愛イメージの「大切・必要」が低くなり, 「刹那的・付加価値」が高くなる結果となった。

したがって、仮説 (3) については, その一部を支持する結果にとどまったと言える。今回の結果からは, 両親間の DV を目撃することは, 恋愛をしたいという気持ちを低下させてしまうことを示唆している。「大切・必要」なイメージには具体的に, 「恋愛は常に行っていたいと思う」や「恋愛は私の心の支えだと思う」, などの内容が含まれており, これらのイメージの低下は恋愛そのものを根本的なところから悲観してしまっている様子がある

がえた。一方で、「利他的・付加価値」（たとえば、「恋愛は時間とお金の浪費である」、「恋愛は遊びである」）なイメージが高くなることは、DVを目撃した子どもたちが恋愛において、特定のパートナーとの親密で安定した関係を築けていないことを示唆しており、異性に積極的に関心を持ちながらも、非常にドライな関係性を築く傾向にあるのではないかと考えられる。なお、恋愛において相手のことを理解し思いやることや助け合うこと、信頼感を築くことなどの「相互関係」のイメージや、新たな自分を発見したりお互いに成長したりするような「成長」のイメージは、特定のパートナーとの望ましい親密な関係が築けて初めて感じることでできるものではないかと推察され、恋愛そのものをネガティブに捉え、パートナーとの継続した親密関係が築きにくいと思われるDVを目撃した子どもたちは、「相互関係」および「成長」といったイメージは、それを感じる関係性作りに至っていない可能性が推察された。

つまり、本研究で得られた結果から、DVを子どもが目撃することは両親の夫婦関係の認知に影響し、それは子ども自身の恋愛イメージを歪ませ、健全で親密な二者関係を築きにくくさせる可能性が少なからずあるということが示唆されたと言えよう。

今回の研究では、DVを父親から母親に対するものに限定して調査を行ったが、性差や世代間連鎖などの視点も考慮し、今後は母親から父親に対するDVについての研究も行っていく必要があると考えられる。また、DVや子どもの夫婦関係の認知、子どもへの影響を絡めて扱っている研究は少なく、今回の結果のみでは不十分であることは明白である。

今後はさらに数量的、学術的研究を積み重ね行っていくことが重要な課題であると言える。加えて、本研究ではDVが子どもに及ぼす影響として、次世代への暴力の連鎖にも繋がる要因の一つと考え、青年期以降の恋愛イメージを取り上げたが、DVが子どもに与える影響は様々であり、ほかにも多くの要因が考えられる。今後はそれら考えられる要因の一つ一つを取り上げ、更なる研究を続けていく必要性があると思われる。昨今の社会的状況やDVという言葉が徐々に公になり始めている今、心理学をはじめ、医学、社会福祉、さらには法的立場からもDVに関する研究を行う価値は大きいものと言えるだろう。

最後に、最近ではデートDVと呼ばれる青年期のカップル間でもDVが生じているという実態がある。これを含め社会的な支援について言うならば、夫婦間のDVはもちろん若者世代のデートDVについての正しい知識の教育や、青年期を対象に早期の予防教育や啓発活動を積極的に行うことが、次世代のDVを減らす一因となりうるのではないだろうか。